

「ご一同様、見事にできあがったこの萩原の土手。さてもさても、見事でございますな。」

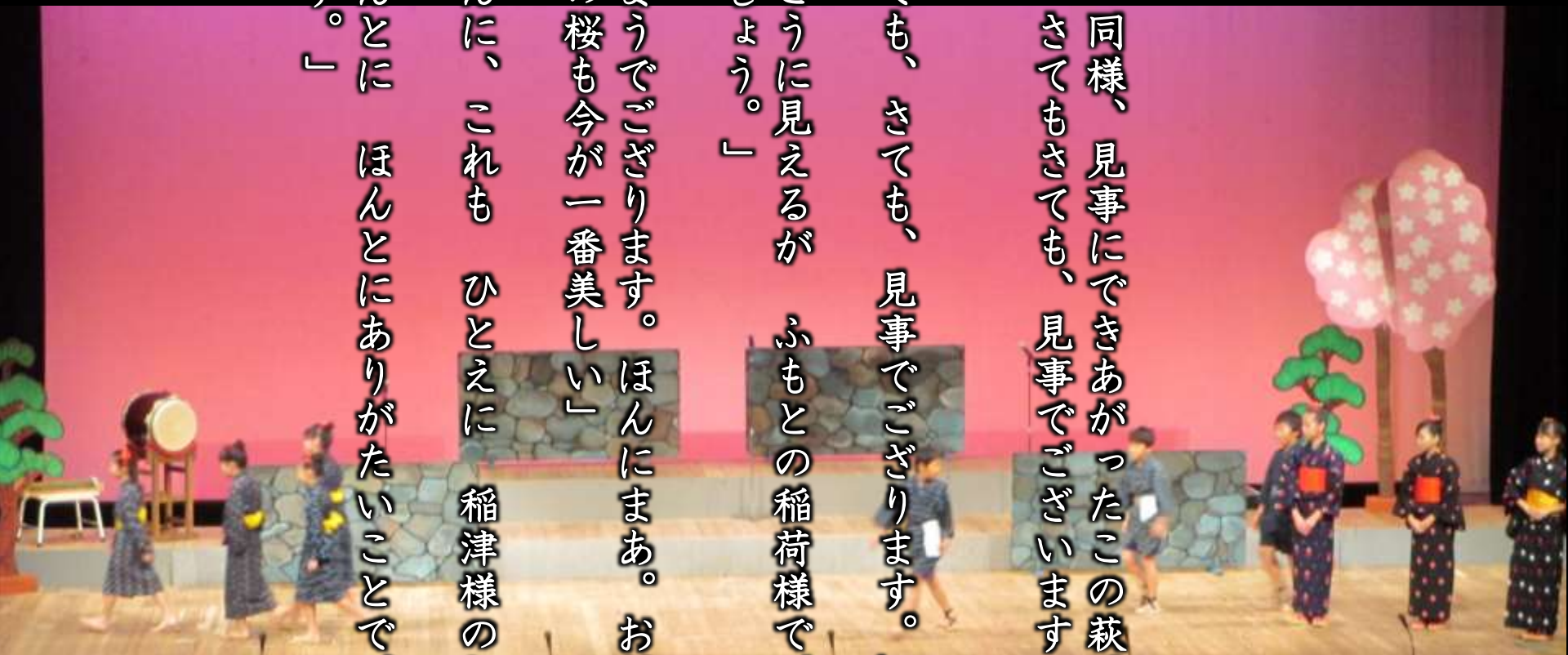
「さても、さても、見事でござります。」

「向こうに見えるが ふもとの稲荷様でござりますしょう。」

「さようでござります。ほんにまあ。お稲荷さんの桜も今が一番美しい」

「ほんに、これも ひとえに 稲津様のおかげ。」

「ほんとに ほんとにありがたいことでございます。」



「やれやれ、わしまだが、今日はあまりのうれしさに、出て参りましたわい。」

「あら、おば様、おじい様！」

「まあ おそろいで。これはおめずらしい。」



「さあ、さあ、こちらへおいでなされませ。
稲荷様の桜がよく見えまする。」

「見事な堤になりましたなあ。」

「おうおう。見事見事！見事な堤ができました。」

「さてもさても、見事でございます。」

「稲津様のおかげでござります。」

「いかにも いかにも」

「まことに稲津様は神か仏か。ありがたいこと
じゃ。」

♪ かのや 稲津様は

仏か神か

死ぬる命を 助け給う

「殿様のお成りいふ。」

「殿、こちらでございませす。」

「おお、さても見事なこの眺め。松の緑もあざやかに。桜の色もほのぼのと。球磨の川瀬に浮く舟も。すばらしき。この眺め。」

「ご満悦の態を拝し、まずは 恐悦しごくに存じ上げませす。」

「佐渡守殿」

「はっ！」

「これまでの ご心労のほど お察しいたしますぞ。今日のご心中さぞかしとお祝い申し上げます。」

「ありがたき お言葉。大慶至極に 存じあげます。」

「国栄え、万々歳の御代のありがたき。重賢も、身にしみてうれしゅうござる。」

「お父上 ほんにまあ、見事な桜……あの桜を見に行きとうございます。」

「姫君のお部屋から見えるお城の桜にも劣らず見事でございます。」

「うむ。桜の色も 今を盛りと咲き誇る……人の誠の心の色じゃ。」

「お、それぞれ、佐渡守殿。みなの方より
神、
仏と歌われし稲津弥右衛門はいづくにおる
か。」

「ただ今、御前に。これ、弥右衛門をこれ
へ。」

「稲津弥右衛門めにござります。」

「おお、稲津弥右衛門なるか。近う、近う。」
「はっ、はっ」

「稲津弥右衛門、面をあげい。そちの このた
びのはたらき 何よりも 満足に思うぞよ。」

「はっ、はっ、身に余りましたる光栄。私め
ただただ お殿様のお心にふれ感泣致しており
まする。」

「たれかある。ほうびを持って。」



「申し上げます。お祝いのため、家中のお
女中たちが 舞をご覧にいられたいと申してお
りまする。」
「おお、よくぞ申した。さ、さ、舞を見せて
くれ。」



♪ 水に映えたる 緑の松に
もみじ錦は 風にゆれ
球磨の川水 萩原堤
名所な名所 千代かけて

金の稲穂の 実りの秋を
よんでたもうた 稲津様
神のみわざと 仰いで今日も
祝えや祝え 千代かけて

「見事！見事！」

「見事な舞でござります。」



「お祝いのため 植柳村より 棒踊りの者達
はせ参じております。」
「おお、よくぞ参った。さ、さ。見せてく
れ。」
「それ！」

「ヤア！」
「それ！」

♪ さても見事な 萩原の土手よ
流れ千間 五十五間
ふもと山から 球磨川見れば
上り舟やら 下り舟

「見事、見事。もう一度 所望じゃ。」
「はっ！それっ！」

「ありがとうございました」

